

二次評価

初期評価で一次救命処置を要するような緊急事態や重度の後遺症が残る可能性のある重症外傷を除外できた後、医療機関への搬送前にどのような救急対応が必要か、情報を収集するために行うのが二次評価である。JSPO-AT は法令等に認められた範囲で、適切な救急対応を選択し実施することを目的とした安全な評価を行う。ここでいう安全な評価とは、損傷部位の悪化や二次損傷が発生する可能性を伴わない評価のことである。したがって、評価をせずに救急対応を行うこと、あるいは明らかに損傷部位の二次損傷を助長するような対応をすることは、重大な危険を伴うため避けなければならない。

二次評価は、「聴く」「見る」「触る」の3つのステップで実施することができる。これらは、医療資格者が行う外傷・障害評価として代表的な、問診 (history)、視診 (observation)、触診 (palpation)、スペシャルテスト (special test)、通称 HOPS のうち最初の HOP を JSPO-AT が行う救急対応にあてはめたものである。「聴く」「見る」「触る」のステップを用いて、プレーヤーを医療資格者へ引き継ぐために必要な主観的および客観的情報を収集する。

1 「聴く」

救急対応を行う前に重要なのはプレーヤーの主訴をしっかりと聴くことである。スポーツ外傷の現場では、JSPO-AT をはじめとする目撃者がいることが多く、受傷機転が明らかになりやすい。これはその後の判断や救急対応に直接結びつく情報が得られる可能性が高いことを示す¹⁾。「聴く」ではより詳細な発生機序、症状、関連する既往歴の有無などについてヒアリングする。痛みについては表 4-2-1 のような質問をしながら主観的な情報を収集する。その他の項目としては、神経症

状の有無、骨折音や捻髪音の有無などを確認する。

一般的に外傷・障害の情報収集では、できるだけ多くの情報を引き出すために「どうしましたか」「どうすると痛いですか」など、プレーヤーが自由に答えられるオープン・クエスチョンで聴くことが望ましい。一方で、痛みが非常に強いケースや語彙力の乏しい対象者などへのヒアリングでは、「はい」「いいえ」で答えやすいクローズド・クエスチョンを織り交ぜながら実施する方法もある。

2 「見る」

見る＝観察は、プレーヤーが受傷した瞬間から始まっている。プレーヤーの受傷後の姿勢、立ち上がって歩いて来れるなら、どのような姿勢や歩行／跛行で JSPO-AT へアプローチしてくるか、顔色、表情、その他の所見を観察しながら大まかな状況を把握する。実際に損傷部位を重点的にチェックする際、二次損傷やさらなる悪化を引き起こさないように注意し、四肢の場合は必要に応じて肌を露出させて左右両方の観察を行う。また、皮膚の色調、付着物、創傷、腫脹、変形、発疹、出血などから異常がないかを判断する³⁾。

3 「触る」

「聴く」「見る」で得られた情報をもとに、損傷部位およびその周辺組織の痛みの部位、熱感、変形の有無についてランドマークを基準に実際に触って確認し、医療機関への搬送前に適切な救急対応を行うための情報とする。損傷部位が四肢の場合は「見る」と同様に左右の比較をしながら健側から触ること、

表 4-2-1 痛みの OPQRST 評価ニーモニック（語呂合わせ）

Onset（始まり） いつ、どうやって痛くなりましたか。
Provocation/Palliation（誘発要因） 何が痛みを悪化または軽減させますか。
Quality（痛みの質） どんな痛みですか。鋭い痛みですか、鈍痛ですか。
Region/Radiating（関連痛） どこが痛いですか、一番痛い部位を指一本で指せますか。関連痛はありますか。
Severity（ペインスケール） 痛みの強さを 0 から 10 段階（10 が最も痛い）で評価するとどの程度ですか。
Timing（タイミング） 痛みは持続的ですか、断続的ですか。

（文献 2 より）

痛みのある部位より遠くから触ることが望ましい。

まとめ

適切な救急対応および搬送方法は、二次評価で取得できる情報で決まる。スポーツ現場での「聴く」「視る」「触る」は、医療資格者へ引き継ぐための救急対応を安全に遂行するために必要最低限の評価であり、得られた情報の連携は欠かせない。JSPO-AT として実施可能な二次評価を行った結果に基づいた救急対応を的確に行い、プレーヤーを安全に医療資格者へ繋ぎたい。

参考文献

- 1) 救急救命士標準テキスト編集委員会編，外傷救急医学．救急救命士標準テキスト 第 5 巻 改訂第 8 版，へるす出版，東京，p108，2014.
- 2) 日本救急看護学会編，救急患者・家族のアセスメント．スタンダードケアシリーズ 救急看護スタンダード，照林社，東京，pp45-46，2024.
- 3) 救急救命士標準テキスト編集委員会編，専門分野．救急救命士標準テキスト 改訂第 10 版，へるす出版，東京，p302，2020.

（八田倫子・砂川憲彦）